

#S8 カナン篇 -T. C. 4753-

俺の頭のなかには、ノイズが眠っている。
もっともそれは――
人によっては多大な価値を持つものらしい。
巨大な陰謀の真相だの、紛争の影の真実だの、
ご大層な肩書きを聞かされた。
いずれにせよ、
俺の任務には、関係のないシロモノだ――――
だが、ノイズは常に解析されることを求めて、
俺の脳裏で呻き続ける――――
そう、あの時から――――

#S8 カナン篇 -T. C. 4753-

『昨夜の第一報でもお伝えしたように、星団連邦の全域で、レアリエンによる暴走事故が発生しています。
これらの事象が同時多発的に起きていることから、
なんらかの意図を持った者によるテロ行為であるとの見方が強まっています。
政府ではこれあレアリエンが――あ、少々お待ちください――――
えー、新たな情報が入りました。
当局が独自に入手した、連邦捜査局による今回の事件の調査結果報告によりますと、
暴走事故を起こしているレアリエンには、一定の共通する型番が存在している模様です。

該当レアリエンはすべて、製造から二年以内の新しい型——
ないしは、ミルチア星系で再調整を行われた型に限定されているようです。
一部ではありますが、その型番が判明しているものをこれから読み上げたいと思います。
DZ-1006448、DZ-2000330、DZ-1001007—————』

ヘルマー『以上が現在、連邦各地で起きている事件の一部だ。
レアリエンの暴走は連鎖反应的に拡大しつつある。
明日の今頃には、その型番を読み上げるだけで、番組枠を丸々ひとつ潰すことになるだろう。』

カナン：——で、その事件には、今回の作戦といったいどんな関連がある？
なぜ俺が選ばれたのか、そこのところを教えてください。

軍は、すべてのレアリエンを拘束したと聞く。我々への危惧を思えば、当然だろう。

ヘルマー『それは一般的な話だ、カナン。君はヴェクターで調整された、特殊なレアリエンだ。
他のレアリエンのような暴走は起こさないと、CEO 自らのお墨付きもある。』

???：それに、並みのパイロットでは E.S. を制御することはできない。
君を外すことは、僕らの選択肢の中には存在しないからさ。

カナン：—————

ヘルマー『紹介がまだだったな、彼の名はケイオス。
今回、君の機体にガンナーとして同乗してもらうことになっている。

カナン：やめておいた方がいい。普通の人間が E.S. に乗ることはできない。

ケイオス：そう————だから僕がここにいる。それでかまわないだろう？

ヘルマー『———そういうことだ。よろしく頼む、カナン。』

—

カナン：ジェネレーター、起動を確認。定格出力を確保、E.S. アシエル、アイドリングへ。

ケイオス：火器管制、オールグリーン。ジェネレーターから火器への出力供給を確保—————

カナン：ブリッジ、こちら E.S. アシエル。発進準備完了。

オペレーター『先のブリーフィングの通り、今回の作戦は極秘のものです。

識別コードはすべてオフ——本艦からのバックアップありません。自力で降下、帰投してください。

敵勢力であるミルチア旧政府軍だけでなく、ミルチア地表に展開中の連邦軍からの攻撃も想定されます。

くれぐれもお気をつけて—————』

カナン：心配は無用だ、俺は必ず戻ってくる。

ケイオス：オペレーター、再確認します。僕らはポイント MN441 を目指せばいいんですね。

オペレーター『はい、目標地点には現在、U.R.T.V. 部隊が展開中です。その保護を最優先としてください。』

ケイオス：全員――？

オペレーター『可能であれば、とのこと。』

その後、これは状況次第ですが、U-TIC 機関のマザーフレームに侵入――
今紛争のきっかけとなった”Y 資料”の入手を試みてください。』

ケイオス：了解、やってみます。

カナン：E.S. アシエル、出るぞ。射出要請――

オペレーター『射出要請、確認。E.S. アシエル、B デッキへ誘導。』

カナン：防御シールド展開、いつでもやってくれ。

オペレーター『了解、これより電磁射出を開始、―――ご武運を。』

――

カナン：現在、対流圏を降下中。機体表面温度、通常値へ――

降下軌道を 0.22 修正、これで目的地の近くに降りられるはずだ――

ケイオス：――接近警報！ 敵勢力と思われる迎撃機、確認。

インターセプトコースでこちらに接近中。数は――

カナン：数を数えているひまがあるなら、さっさと全機、撃墜しろ。

ショックウェーブを利用して、優位な位置につく。

ケイオス：了解、相手は無人機みたいだね。対G限界がないから、機動性能は僕らより高い。

かなり無茶な機動をしてくるかもしれないな。

カナン：――ならば、動きは読みやすいはずだ。

ケイオス：――たしかにね。

ケイオス：――全機撃墜。

カナン：さすがに言うだけのことはある。ずいぶんと E.S. での戦闘に慣れているな。

ケイオス：まあね――

カナン：機体からのフィードバックはどうだ？ 常人なら、とうに気絶していてもおかしくない状況だ。

無理をされていると、作戦進行に響く。

ケイオス：大丈夫、かなり無茶な機動だったけど、かえって刺激的なくらいだよ。

カナン：そうか――だが、わずかでも異常が感じられたら、即座に後席へのバイパスをカットする。

こいつは、俺ひとりでもパイロットとガンナーを兼任できるからな。

ケイオス：了解――でも、第二波が近づいてる。これじゃ、キリがないね。

A.B.R.のエネルギーもあまり残っていないし、降りられる場所を探そう。

カナン：ふん――もっともだな。

――

カナン：――現在地点の確認を終了、目的地より、だいぶ離れてしまったようだな。

ケイオス：降下中に引っかかった対空網のことを考えると、空からの再接近は難しそうだね。

カナン：陸路で市街を抜けていくしかないな。瓦礫とはいえ、ビル群が残っている。敵の索敵をかわすには、充分だ。

ケイオス：そうだね、できる限り急ごう。もうあまり時間がない――

カナン：時間がない？

それはU.R.T.V.とかいう、デザイナーズチャイルドたちと、なにか関係があるのか？

ケイオス：うん――

正確には、これから起こるであろう危機から彼らを護るために、僕らはここに送り込まれたんだ。

カナン：ブリーフィングで受けた説明とは、かなり食い違いがあるな――

ケイオス：だろうね――

連邦政府の特殊部隊U.R.T.V.は、第一次降下作戦の失敗を受けて投入されたんだ。

作戦失敗の原因は、U-TIC機関が巨大機動兵器を投入したためだったらしい。

U.R.T.V.は、その稼動エネルギー源であると思われるゾハルとのリンクを断ち切ることができるんだ。

カナン：つまり、連邦軍の切り札というわけだな。

ケイオス：もっとも、巨大兵器は第二次降下部隊が撃破したらしい。

カナン：だが、同種の兵器が逐次投入されてくる可能性は否定できない。

ケイオス：そう、だから彼らは投入されたんだ。開発者であるディミトリ・ユーリエフ博士の強い要請もあったらしい。

博士が示したデータには説得力もあったし、軍上層部はその成果を信じて疑わない。

たとえそれが、とんでもない危険性を孕んでいるものであっても――ね。

カナン：なにか、問題が発生したのか？

ケイオス：――第三次投下作戦発動の直前、ユーリエフ博士が、U.R.T.V.のひとりに殺害された。

カナン：ザルヴァートルは指導者を失ったということか――

ケイオス：さらにU.R.T.V.部隊まで、先の第一次降下部隊と同様に、連絡を絶ってしまった。

未確認だけど、市民に無差別攻撃を加えていたという情報まである。

カナン：とんだ切り札だな。暴走した兵器ほど、手に負えん存在はない。

ケイオス：問題はね、U.R.T.V.がただの兵器ではなく、意識を持った”人”であるということなんだ。
ゾハルをコントロールしているシステム——つまりU.R.T.V.の標的は、
かつてU.M.N.の転移システムとして設計、運用されていたものらしい。
ただ——

カナン：ただ——？

ケイオス：これまで何度も生体転送が試みられてきたけれど、そのいずれもが失敗に終わっている。

カナン：記録では、その99.76%が即死と出ているな。

ケイオス：ごくまれにはあるけれど、生還者はいたらしい。

ただし、人としてではなく、モノとしてね。

生還者は二度と、人を人たらしめる”意識”という存在を取り戻すことはなかった。

カナン：精神崩壊か——

ケイオス：システムとの接触が、人の精神に崩壊を引き起こす——

だとしたら、たとえその半存在として生み出されたU.R.T.V.であっても、その危険性を常に孕んでいる——

彼らもまた、”人”である以上、ね。

U.R.T.V.の精神崩壊が、ゾハルの暴走という事態を引き起こしでもしたら————

彼らと出会ったことのあるヘルマー中將は、その危険性を考慮されたんだ。

カナン：このミルチアへ派遣された艦隊の司令長官が危惧してさえ、参謀本部の決定は覆らなかった。

そこで俺たちが抜擢された——というわけか。

ならば、時間的余裕はあまりないようだな。目的地点へ急ごう。

ケイオス：——————

カナン：どうした？

ケイオス：ごめん、ちょっといいかな。

カナン：な——こんなところで、機体外へ出ただと？

————アシェルを俺ひとりで操ることはできるが、奴のガンナーとしての能力は有効だ。

仕方あるまい、ここは奴と行動をする方が得策か————

ここか————地下シェルターが開いている。こんなところに潜ったのか————

ケイオス：——————

カナン：——ここにいたのか、なにをやっている？

ケイオス：これを見て――――

カナン：これは――この都市の情報センターか。

ケイオス：そう、これによると――さっきの街路を直進しても、全壊した区画に行き当たる。

カナン：なるほど、東の区画から回り込んだ方が早そうだな。

ケイオス：ここの情報、君に転送してもいいかな。

カナン：無論だ、俺の脳に用意されたデータバンクは、こういう時のためにある。

ケイオス：――――始めるよ。

カナン：ああ。

ケイオス：後は――――こっちの復旧かな。

カナン：物流の管理センターか。しかし、そんなものが直るまで、ここで足止めされるつもりはないぞ。

ケイオス：大丈夫、ナノマシンにメンテ指令を出していただけたから。

カナン：ナノテクで復旧？ それでは復旧に何か月か、下手をしたら年単位でかかるぞ。

――無駄なことをするものだ。

ケイオス：そう言わないで、セットするだけなら、すぐ終わるから。

――――ほら、終わった。

カナン：気が済んだのなら、もう行くぞ。これで20分のタイムロスだ。

ケイオス：ごめん――――

！　これは――――

カナン：なんだ、この光は――――！ それにこの音――いや、歌――か、これは――！

ケイオス：これは”ネピリムの歌声”――！

カナン：ネピリムの歌声？

ケイオス：ありえない――U-TIC 機関なら、この歌声の危険性は承知しているはず。

！　まさか、先の降下部隊が全滅したのは――――

カナン：ぼけっとするな――！　ここは戦場だぞ。

ケイオス：ごめん、敵機はA.M.W.S.だね。識別は――第二次降下部隊の機体だって？

カナン：どうやら、敵と判断されたいらしいな。――どうする？

ケイオス：目的地にたどりつく前に、撃破されるわけにはいかない。

非常用の識別信号を解放して、こちらが味方である事を知らせよう。

カナン：俺の判断で、とくにやっている。識別信号は認識しているはずだが――

ケイオス：攻撃がやまない――様子が変だ。

カナン： どう考えても、まともな状態ではないようだな。

———！

ケイオス： これは——！

カナン： ぐう——うう——

ケイオス： 待って、だめだよカナン！ ”その声”に耳を傾けちゃ！
しまった、A.M.W.S.に包囲されてる！

カナン： なんだ——どうなった？

ケイオス： いきなり現れたA.M.W.S.が、暴走してた機体を、すべて倒したんだ。実体剣の斬撃でね——

カナン： 何者だ——？

ケイオス： わからない——いや、通信が入った。

？？？ 『その所属不明機——先ほど、貴殿の識別信号を受信しました。

正規のものとは異なるようですが、味方と判断してもよろしいですか？』

カナン： なるほど、まともな兵士も残っているようだな。———どうする？

ケイオス： 向こうの機体もかなり損傷してるけど、ここは共闘するべきだね。現状を切り抜けることが最優先だよ。

カナン： 了解した。

？？？： ふう———

カナン： （この男———こんな戦場で機体の外に身をさらすとは———）

？？？： 見たところ、正規部隊ではなさそうですが——早々に帰投された方がよいでしょう。

ここは危険です。ここは——人が人でなくなる場所だ。

ケイオス： 人が人でなくなる場所——

カナン： 俺たちも任務を帯びてきている。完了するまで、帰投するわけにはいかないな。

？？？： そうですか——私はジン・ウヅキ大尉。あなたがたは———

ケイオス： ！

危ない、大尉！ 後ろのA.M.W.S.はまだ生きてます！

ジン： ———！ はあああああっ！！

カナン： な———！ 生身で、刀で、A.M.W.S.を破壊しただと！

ケイオス：すごい人もいたもんだね———

カナン： 驚いたな、あのパイロットには機体の戦闘不能もまったく関係ないらしい。

ケイオス：大尉、さっきは危ないところをありがとうございました。

僕の名はケイオス、彼はカナン。大尉は降下作戦に参加されていたのですよね。

ジン：ええ、第二次の部隊です。

カナン：では、巨大兵器を倒したという――

ジン：ええ、プロト Ω――怖ろしい兵器でした。

部隊の生き残りは地表へ降下したのですが――

ほとんどは同士討ちで壊滅してしまいました。

カナン：そんなことが――

ケイオス：大尉なら、ご存じではありませんか？ U.R.T.V. 部隊が現在、どこに展開しているかを――

ジン：U.R.T.V. ―――ユーリエフ博士の遺産、あのデザイナーズチャイルド部隊ですか。

カナン：（この男――妙に情報に通じているな

ユーリエフが害されたのは第二次降下作戦が発動した後だというのに――

”遺産”だと――？）

ケイオス：僕たちの任務は、そのU.R.T.V.の保護なんです。ご存じなら、教えてください。

ジン：ふむ、期せずして、目指すべきは同じ方角というわけですか――

いいでしょう。これもなにかの縁、その近くまで一緒にいたしましょう。

ケイオス：同じ方角――？

ジン：私が目指す場所はラビュリントス、そして、彼らU.R.T.V. もいま――

そのほど近く、忌まわしき場所にいるはずです。

ネピリムの歌声、その発生装置の最深部に――

――

ジン：――そこは、足場がもろくなっています。気をつけて。

カナン：この程度なら、問題ない。

ジン：すみませんね、ずいぶん歩かせてしまいまして。

ケイオス：いえ、こんなところじゃ、機体が入ってこれませんからね。

それより、いまのお話ですけど――

カナン：たしか、この戦いが仕組まれたものだ、と言っていたな――

ジン：ええ、その通りです。

U-TIC 機関を――いや、このミルチアのクーデター勢力をスケープゴートに仕立てた、ね。

現在、連邦各地で起こっているレアリエン暴走事故も、そのための些細なきっかけでしかない。

ケイオス：いったい誰が、なんのために――

ジン：今回の紛争の背後には、巨大な勢力の影があります。

U-TIC 機関はその隠れ蓑と思って、間違いないでしょう。

連邦からの分離独立を目論む、ミルチア旧政府のクーデター。それすらも、表向きにすぎない。

すべては、”あるデータ”を完璧なものとするべく、その勢力が演出した紛争なのです。

カナン：あるデータ――

ジン：――Y 資料。

ケイオス：Y 資料？

ジン：これを見てください――

カナン：データディスク？それがY 資料とやらか？

ジン：いえ、残念ながら――これは、ある人物が私に託した記録です。

その人の言葉によれば、この暗号化された記録を解凍することで――

巨大な陰謀の真相、紛争の影の真実、それが明らかになるのです。

ケイオス：真相、真実――

ジン：ええ、そしてすべての事象から得られる様々なデータは、ある領域でひとつに集約されています。

その先にあるのが、Y 資料として記述されている特異領域――

ケイオス：ウヅキ大尉、いったいどうやって、そんな情報を――

ジン：まあ――いろいろとね。

――さあ、見えてきましたよ。

カナン：あれが、ネピリムの歌声――

ジン：正確には、その発生装置の頭頂部です。残念ですが――案内はここまでです。

現在、U.R.T.V.はこの下層深部の装置内部に展開しているはずです。

ケイオス：そうですか――ウヅキ大尉、ここまでありがとうございます。

ジン：いいえ、気になさらずに。それよりも、あなた方を助勢できず、本当に申しわけない。

ですが私はこの先のラビュリントスへ行き、託されたデータをデコードしなくてはならない――

この紛争の背後にいる、影の正体を暴くために。そして、もうひとつ――

決着をつけるために。

カナン：決着――？

???：ほお、こそこそ逃げ出したかと思っていたが、殊勝な心がけではないか――ウヅキよ！

ジン：マーグリス大佐――

マーグリス：ウヅキー貴様にはコソ泥の才能もあったのかと感心していたが、どうやら見当違いだったようだな。

わざわざ、死地へ戻ってくるとはな！

ジン：大佐の寂しがっている顔が目には浮かびましてね。

去りしなに、一目会っておこうと戻ってきましたよ。

マーグリス：ふっ、相も変わらず、口の減らない奴だ。それに虚勢下手なのも変わらん。

ウヅキ、貴様の手に行っているデータだけでは、”我々”は揺るぎもしない。

ジン：――でしょうね。だからこそ、私はこの先に用がある。

マーグリス：ならば――言わずともわかっているな。

ジン：無論――ですが、もうひとつだけ、聞いておきたい。

マーグリス：問うてみる。

ジン：ペレグリーも――この惑星に来ているのですか？

マーグリス：なにかと思えば、女の話か。つくづく、ふぬけになったものよ。

ジン：なんとでも評してください。

ただ、これだけは言っておきます。彼女にはまだ、光さす道を歩む資格がある。

大佐、あなたとは違って――

マーグリス：未練よな、ウヅキ。あの者として、おのが道はおのれで選ぶ。”よくわかっている”のではないか？

ジン：――その通りですね。

――

では、はじめるとしましょうか。

マーグリス：ああ、いい加減、待ちきれなくなってきたところよ。

ケイオス：（大尉、僕たちの力も必要なら――）

ジン：（いえ、それには及びません）

カナン：（なぜだ、戦場に決闘の美学でも持ち込んだつもりか？　くだらん感傷だ）

ジン：（そうかもしれせん――）

マーグリス：密談なら、あの世で存分とやれい！

行くぞおおっ！

ジン：はあああっ！

マーグリス：ふんっ！

ジン：くっ――

マーグリズ：きええええいっ！

ジン：ぐーーーーー！

カナン：（ふたりとも、なんという力と技だー）

ケイオス：（だけど、大尉の方が分が悪い。圧されているーーーー
というより、動きにキレがない、！ まさかーーーー）

マーグリズ：無様だな、ウヅキ！ 手負いでこの俺に挑むとは！
もっとも、その傷がなくとも、結果は見えていたがなー！

ケイオス：大尉、その傷は！

ジン：先ほどの戦闘で少しーね。なに、ご心配には及びません。月並みですが、ただのかすり傷です。
たああああっ！

マーグリズ：ぬるいわっ！

ジン：まだまだっ！

マーグリズ：それだけの手傷を負って、なお刃向かおうとするとはなー
ふふふふふ、悪あがきだけは一人前か。

ジン：何事も、終わってみなければわかりませんよ、大佐！

マーグリズ：減らず口がーうらああああっ！

ジン：ぐうううっ！

マーグリズ：ちいっ、浅いかーーーー

ジン：はあ、はあ、はあーーーー

マーグリズ：だが、貴様の實力なぞ、所詮その程度。技も力も俺の方が上であることが、これでわかっただろう。
（それを、あの老いぼれはーーーー）

ジン：あなたの言うとおりかもしれない、大佐ーーーー

マーグリズ：ふん、晩節は正直者だったと惜しまれて逝くつもりか。

ジン：私はいつでも、正直に生きてきたつもりですよ。ただー
あなたの目が曇っていただけです。

マーグリズ：ぬかすわ！

ジン：技も力も優れたあなたが、なぜ、祖父に認められなかったか、その答えがこれですーーーー
いやあああああっ！

マーグリズ：来るか、ふんんんっ！
ぐおおおおおおっ！

貴様の太刀などが、この俺に！

ジン：大佐―――斬ったのは、あなたの顔面だけではありませんよ。

マーグリス：な――に―――

ぐ――貴様、我らの足場を――！

ジン：―――ともに落ちましょう、地の底まで。

マーグリス：ウヅキィィッ！

ケイオス：大尉！

カナン：掴まれっ！

マーグリス：おのれええ―――

―――

ジン：大佐―――

ケイオス：大尉、危ないところでしたね。

カナン：まったくだ、俺たちが掴まえていなければ、今頃はあの男とともに――

ジン：面目ない――正直言って、あなた方に期待していました。

ケイオス：なるほど―――これが、さっきの”答え” えすか。

ジン：そうですね――そのひとつです。

大佐は――あの人は、他人の力を借りることを知らない。

その一点だけでも――私は、彼に負けるとは思いません。

ケイオス：なるほど―――強いわけですね、大尉は。

ジン：ケイオスくん、カナン――勝手を言って申しわけありませんが、もうひとつ、甘えさせていただきたい。

これを―――

カナン：このデータは、さっきの―――

ジン：カナン、あなたの脳に、これを転送させてもらえませんか。

カナン：この程度の容量なら問題ないが、かまわないのか？

ジン：ええ、あなた方は――ヘルマー中將の意を受けているのでしょうか？

カナン：お見通し――か。

ジン：中將の手にでしたら、すべてが渡ってもかまいません。あの方なら、信頼できる―――

カナン：―――わかった。そこまで言うのなら、引き受けよう。

ジン：ありがとう―――

これから私は、敵の中心部へ乗り込みます。志半ばで斃れることもあるでしょう。

その時は――そのデータに隠されたこの紛争の” 真実の姿” を、いつか白日の下に――

ケイオス：ウヅキ大尉――

ジン：頼みましたよ。あなた方にも任務があることは承知していますが――

生き延びてください。

カナン：ああ、そのつもりだ。

ジン：ありがとう。では――お元気で。

ケイオス：行ってしまったね――

カナン：ああ、もともとそれぞれに目的にたどり着くまで、同道しただけのことだからな。

ケイオス：――いや、ここで大尉と出会ったことは、ただの偶然なんかじゃない。

カナン：どういう意味だ？

ケイオス：ごめん、気にしないで――

それより、急ごう。U.R.T.V. はここの最下層にいるらしいからね。

――

???：誰か――誰か――手を貸してくれ――

止まらないんだ――ニグレドの血が、止まらないっ――

ううう――

ニグレド：うっ――も、もういいよ、ルベド――

はあ、はあ、はあ、もう――いいんだ――

ルベド：馬鹿――っ、あきらめちゃ駄目だ！

ケイオス：見て、この下の層――人影だ――ふたり、かな。

カナン：U.R.T.V. 変異体――2 体を発見、確認した。

ケイオス：（赤き馬は争いを、黒き馬は――飢えを携えて来たる。

その小さい背に、大きな厄災を背負わされて――）

カナン：音声不明瞭で認識できない。なにか言ったか――？

ケイオス：――なんでもないよ、彼らを保護しなくちゃ。

ルベド：俺が――俺が悪いんだ――

リーダーなのに、連鎖[リンク]を遮断したから――だから――アルベドが――――

カナン：（――アルベド？）

ルベド：あいつは、俺の欠片[かけら]――右胸の鼓動――なのに――――

カナン：――検索結果が出た。アルベド――個体ナンバー 667 の呼称らしい。

記録には、個体ナンバー 666 との”癒着双生児”とある。

人工培養児にも、まれに分離不全が起こるようだな。

ケイオス：（汚染されたんだ、白き馬の騎手もね――――

君たちの傷と魂に、安らぎが訪れますように。それが束の間の休息だとしても――）

こうして俺たちは、任務を完了した。

作戦に参加した多くの U.R.T.V. のうち、救出できたのは 2 体――――

それでも、俺たちが最善を尽くした結果であることに、疑いの余地はない。

そして俺は、やっかいなものを抱え込むことになった。

そう、ジン・ウヅキから託されたデータ――――あの、ノイズだ。

いつか俺は、この記録を解凍するための作戦に

参加することになるだろう。

その時、俺にとってこのノイズは、有益なデータとなるのかもしれない。

その日まで俺は、

ノイズの呻きに悩まされ続けるのだ――――